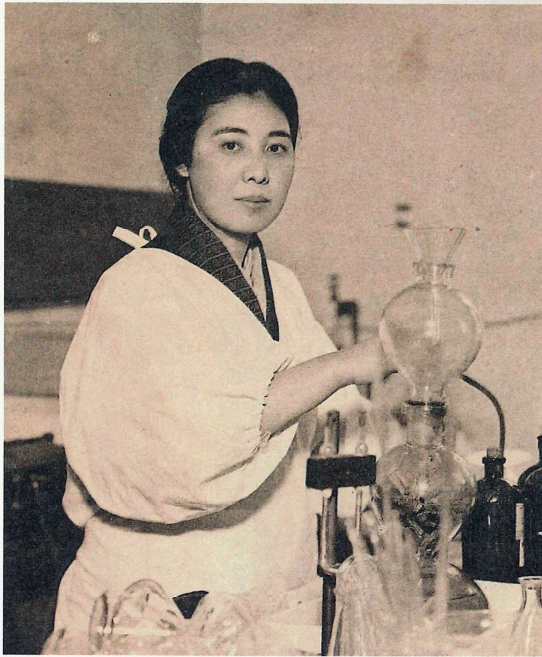


# 開かずの門をこじ開けた闘士加藤セチ — 最初の女性の北大生

大学文書館 井上高聡



理化学研究所で研究する加藤セチ（1930年代、『女博士列伝』より）

案外知られていないが、日本の戦前の教育制度は女性が大学に進学することを全く想定していなかった。通常、小学校六年間の後、中学校五年間、高等学校（または大学予科）三年間を経て大学へと進学したが、これは男性のみの進学ルートであった。女性は小学校卒業後、中学校へ進学できず高等女学校に進学した。この時点で既に大学への進学ルートを断たれていた。

では、戦前には大学に進学した女性はいなかったのかというと、そうではない。一九一三年に東北帝国大学理科大学が優秀な女性三名をスカウトして入学させている。しばらく女性の大学進学者が途絶えた後、一九一八年、女性として四人目、そして自分自身の意志と行動力で大学進学を勝ち取った初めての女性として、加藤セチ（一八九三〜一九八九年）が北海道帝国大学に入学した。

ものではない」との佐藤総長の発言に呼応したのが、東京女子高等師範学校（現在のお茶の水女子大学）を卒業後、北星女子大学の教員を務めていた加藤であった。加藤は農学部入学を志願したが、佐藤総長の意に反して、大学の中では反対意見が多かった。総長室の前に何日も座り込みまでした結果、加藤は正規学生とは認められなかったものの、正規学生と同様に講義と研究指導を受けられる選科生入学を勝ち取った。「もつと深く学びたい」という加藤の情熱が、大学の開かずの門をこじ開けたのである。

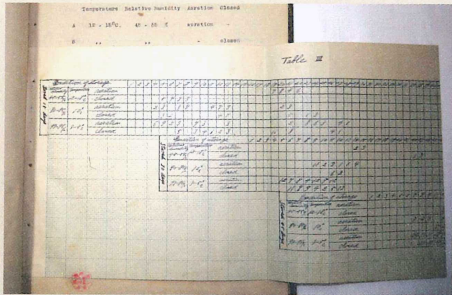
北大入学後、加藤は研究に勤しみ、全科を修了した。間もなく理化学研究所の研究者となり、一九三一年には有機化学の研究で京都帝国大学から理学博士号を取得した。

加藤は理研でも戦い続けた。自分の研究室を持った後は、女性研究者を育て活動の場を広げるため、敢えて女性ばかりを登用した。後に加藤は、女性研究者の先駆としての覚悟と、男性

優遇社会への揶揄を込めて、以下のように回想している。

叩けば裏木戸は開く、割り込んでゆこうと努力すれば小さな机は与えられる。その与えられたことに感謝し、全精神を捧げて学ぶならば次第に光ってゆくであろう。安易な環境は、却って人間を伸びるだけ伸ばしてくれない場合が多い。

どこかで見覚えのある「理研で割烹着」の写真ではあるが、加藤の表情には、女性であり研究者であることの矜持を読み取ることができる。



リンゴの種子の発芽について研究した北大修了論文（農学研究 院図書室蔵）